



阿保義久

(あぼよしひさ) 1965年生まれ。東京大学医学部卒業。東京大学医学部第一外科、虎ノ門病院はかで外科医として経験を積む。2000年北青山Dクリニックを開業。学生時代はバスケットボールに明け暮れたという根っからの体育会系。仕事以外の時間は家族サービスかトレーニングをしている。7時間睡眠を推奨するも自らは4時間睡眠という超多忙な日々。著書は「アンチエイジング革命」(講談社)ほか。



開業医に今、求められていること

医師のジレンマ

下肢静脈瘤のレーザー治療をはじめ、日帰り治療を推進する北青山Dクリニック。血管手術やガン治療を担う外科医として活躍してきた院長阿保義久氏を取り組む医療の現場とはいかなるものか?

メディカルプロデューサー今井義博

(以下、阿保) 開業医として医療に関して「こうしたい」という理想と、

でも実現できないというジレンマもあるのではないですか?

北青山Dクリニック院長阿保義久氏(以下、阿保) 医療という観点で取

り組むとしたらやはり高度な医療を求めなければいけませんから、有能なドクター陣をチームとして置かなければならない。しかし大きな組織では得てして個人は歯車のひとつになつたり、仕組みの中に迎合していかなければならないこともあります。開業医としては組織医療の大切な部分は認識した上でなんとか個人で機能していくことを考えなければ思っていますね。

今井 私は健康保険制度というものに少々疑問があるのですが、保険診療と患者さん自身の選択による自由診療というのでは大きく異なつてく

る部分があります。ここにも医師のジレンマがあるのではないかと思うのです。つまり医師には本来価格抜きで「治してあげたい」という気持ちがあるはずですよ。でも医療法第六十九条の医療広告規制というのがあって、「自分がこういう医療をやりたい」という情報発信が法律上規制されていますよね。

阿保 一般の患者さんの認識としては、医療保険で認められているのが「正しい医療」で、自由診療は営利目的だとか、キャッチーな医療メッセージだとか、本来正しい医療ではないように捉えられていることがまま

あります。アンチエイジング医療などはまさにそのひとつ。最近はその見方も随分変わってきたとは思いますが、情報規制もその要因のひとつではあります。しかし情報の受け手のみなさんも、情報を自ら得る意識を持つていただきたいと思っています。

阿保 治療が上手くいっているとき

には短い時間であっても深いコミュニケーションができたと感じます。あとは治療するだけでなく、診断すること、病気になるようなノウハウの提供、その管理が上手くいったときには、日常的にその患者さん同士で会話をキャッチボールができるんです。そのときは患者さんと医師は目線が同じなんです。医療に関するアドバイザート、それを受ける側というポジショニングを維持することも重要ではないかな。アンチエイジング医療にはまさにそのコミュニケーションがあるのです。

今井 なるほど。アンチエイジング

医師はそれぞれの医療技術を高度化し、
研ぎ澄ませていかなければいけない。
それをつなげる横のネットワークを実現したい

ドクターの新連載 Recipe for the Future の哲学 最先端アンチエイジング

日々進化し続ける
アンチエイジング医療の現場で医師たちは、
今、何を感じ、何を発信しているのか。
メディカルプロデューサー今井義博が聞く
アンチエイジング・ドクターたちの
最新哲学、第一弾。
photographs by Yamamoto Hiroaki

医療では開業医でもネットワークが必要だと思つたのですが。

阿保 医療はどんどん高度化し、専門化しています。医師が専門的な領域をさらに研ぎすませていくことはどうしても必要です。そして患者さんはその高度な医療をすべて享受したいと思うがゆえ、ひとりの医師にすべての医療を求める。ここにもすごいズレが生じます。患者さんはどこまでがそのドクターの専門でどこからが専門外かはわからない。医療人としては高度化し専門化していく自分たちの姿勢と、それらを上手くつなげる横のネットワークづくりをしなければいい医療はできないと思つています。

私も開業する時点でたくさんさんの専門医師を抱えるのは大変でした。でもそれは理想とする医療環境を構築すると同時に、自分の医師としてのスキルアップも同時に行えるだろうと考え、はじめからその態勢をとっていました。それは今も変わっていません。

日帰りで手術、の最新技術

今井 Dクリニックという名前の由来はなんですか。

阿保 デイサージェリー（日帰り手術）、デイリーヘルスケア（人間ドック）、ダーマトロジー（美容皮膚）の3つのDから頭文字をとりました。我々のクリニックでは、これまでは難しかった静脈瘤（膝裏や手の甲などにできる静脈の瘤。加齢とともに多く見られる）の日帰り手術を行っています。これがデイサージェリー。

そのほかに予防医学に力を注ぎたいと考えました。それがデイリーヘルスケアです。近年は美容的治療へのニーズも高まっており、ダーマトロジーも医療サービスのひとつとして加えました。

今井 先生は静脈瘤の日帰り手術を日本でもいち早く行つたのですよね。

阿保 ええ。下肢静脈瘤手術はクリニック開業以前も多く行っていました。

本来は価格抜きで
治してあげたいという気持ちがあれば
医師というのは選べない職業だと思ふ

今井義博

（いまいよしひろ）株式会社キーステーション取締役。医科歯科クリニックの開業支援とプロデュースを専門的に行う。本誌メディカルプロデューサー。「感性と科学」のバランスコンサルティングをモットーとし、数々のクリニックを成功に導いている。毎朝13種のアンチエイジング食を欠かさない健康マニア。

た。従来は血管を抜去する方法でしたが、下肢静脈瘤に特化して手術する医師はそう多くいませんでした。

Dクリニックを開業してから本格的にレーザー治療の日帰り手術を開始しました。レーザー治療は自費診療のため、コストがかかるのですが最近の傾向としてはレーザー治療を希望する人が増えています。Dクリニックでは従来型の手術も日帰りで行っていますが、他の医療機関では今も一、二週間の入院が必要ですから。ハンドベイン（手の甲の静脈瘤）については、他ではほとんど行われていないので、相談にいらつしやる方は多いです。見た目の問題ですが、まずは見た目をきれいにします。そこから入ってメインテナンスとして「健康」というところまで総合的に見ていけると思っていますね。

正しいアンチエイジング意識

今井 今、富裕層にはどんな医療が求められていると感ずますか？

阿保 富裕層の方は色々と勉強していますからね。最近ではドックの質を求められています。「いくらでも出すから病気を見逃してくれな」と。

その中には科学的な裏付けはまだ不十分ですが、遺伝子検査もあります。ドックは医療機関によって中身が全く違うんです。今の技術でこれだけやっておけば、というのはPET（コンピュータによる断層撮影技術）による検査。生体の機能を観察することによって特化した検査方法、ひとつではだめなんです。落とし穴がたくさんある。それよりも他の方法なら泊まる必要がなかったり半日で終わることもあります。そういうプラスアルファの情報も求めていますね。一方で富裕層の方は生活が不摂生だったり、定期的なチェックを受け入れにくい層だったりもするので（笑）。

今井 いい医師選びはどうしたらいいですか。

阿保 アンチエイジングというのは比較的新しい概念なのですが、アンチエイジング医療だけを提供するというのは限界があると思うんです。もともと、というか本来行われている医療というものが絶対ベースになければいけない。アンチエイジング医療は予防と早期発見、あとは生活の質を高めるということに集約できると思いますが、その内容を支える、いわゆる本質的な医療は土台にあるべきです。ですからもちろん医師としての実力がなければいけないし、勉強していなければいけない。ただ説明がわかりやすい人がいいですね。話をした時に、人としての安心感、信頼感があるかどうかですね。

今井 人と人の目線、関係性が求められている時代なのに、そうでない先生がたくさんいますね（笑）。

阿保 そうですね。医学を突き詰めれば突き詰めるほど自分の無知を知るとすよ。すると逆に患者さんとは目線が近づく。医療に今何が求められているか、そこは私が正直に受け入れている部分かもしれません。①



北青山Dクリニック

日帰り手術、予防医療、アンチエイジングの3つをメインに10人の各分野の専門医によるトータルな健康管理のサポートを行う。診療は一般外科、一般内科、血管外科、美容皮膚科のほか下肢静脈瘤、椎間板ヘルニアのレーザー治療、人間ドック、キレーションなど。東京都渋谷区神宮前3-7-10

☎(03)5411-3555 www.dsurgery.com

協力：滝崎真也（東京医科歯科大学医学部非常勤講師）

addictam

アディクタム [オペラ]

Opera

April
2009
N°029

クルマ

Society for Car Enthusiasts

愛しき日々よ

